

ふくろうの染めもの屋

岩手県

むかし。

むかし、ふくろうは染めもの屋でした。鳥たちにたのまれて、着物^{きもの}をいろいろな色に染めてやりました。

そのころ、からすは、たいへんおしやれで、いつもまっ白い着物を着て飛び^とあるいていました。あるとき、からすが、ふくろうの染めもの屋にやって来て、

「わたしの着物を、世界^{せかい}にふたつとない色に染めてちょうだい」といいました。ふくろうは、考えてから、からすの着物を真黒^{まっくろ}に染めました。

「これが、世界にふたつとない色ですよ」

からすは、腹^{はら}を立てましたが、もうどうしようもありません。どんな色にも染めなおすことができません。

そのときから、からすは、ふくろうの顔さえ見れば、おこつていじめるようになりました。それで、ふくろうは、今でも、森のおくにかくれていて、からすが起きて^おいる^{ひる}間は、けつして外へ出ていけないのだそうです。

おしまい。

村上郁再話

資料『日本の昔話』柳田国男／筑摩書房